# 死なないゾンビ

ちゃんこう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
死なないゾンビ

【Ｎコード】
Ｎ２２０７Ｗ

【作者名】
ちゃんこう

【あらすじ】
無職の男　楠　信吾
彼は昔ゾンビと戦った経験があったため、ゾンビのことには詳しい。
そして、男はもうゾンビと戦わない決意をした・・・
だが、ある日、一通のメールが届いた・・・そこに映っていたのゾンビ！
何が起きているか、わからない信吾・・・
このメールが本当かどうかを確かめるために信吾は、メールにうつっている場所を目指すのであった

# ゾンビとメール

俺の名前は楠　信吾
無職だ
いや、これは不況の影響とか関係ない
自分で決めたから・・・
もう、重たい荷物は背負わないと・・・
決意していたのに・・・
決意していたのに・・・
なんで、こうなってんだあああああああ！？
俺は、人の群れに囲まれていた
正確には、人じゃなくゾンビだが・・・
そして、俺のそばには女子高生が数人・・・
・・・こんなことになったのも数時間前にあんなメールが来たからだ・・・

――――――――数時間前――――――――

――――――ピリッピリッ！
信吾：「ん？電話か？」
――――っピ
信吾：「はい、もしもし？」
信吾：「もしもし？」
・・・ん？おかしいな電話・・・しまったこれメールの音だ！
恥ずかしい～まあ、誰もいなかったからよかったけど
一体誰だ？こんな時間に・・・
そう、今は０時・・・
ちょうど日付が変わったころだ
信吾：「こんな、時間にメールなんて送るなよ・・・」
それにしても、変だ・・・
よくよく、考えたら俺はメアドを誰にも教えたことないのに

でもって、携帯の番号も誰のも教えていない・・・
じゃあ、誰だ？
俺は急にメールを見るのが怖くなった・・・
けど、そのまま放置しても仕方ないので勇気を振り絞って見た・・・
そこには・・・
アドレスはデタラメの文字
さらには、本文など何も書かれていなかった・・・
信吾：「なんだ？このメール？悪戯か？」
そう言えば、最近のニュースで携帯会社すべてハッキングされたって言うの見たな・・・
信吾：「悪戯だな・・・よし、削除！！」
俺は、そのメールを消した！
信吾：「はあ～眠い・・・」
今後、こんなメール来ても迷惑だから明日にでも、解約しよう
そう言えば、消したメールに何か付いていたよな・・・
なんだろう？
俺はデータファルダを開けて一番上にある、データを見た
そして、その中には・・・
俺の見慣れたものが移っていた・・・
普通の人はこれを見ただけではゲームかなんかに勘違いするだろう
でも、俺は違ったその写真を拡大などして・・・ようやく、わかった
死体が動いていることが・・・
世間では、公表されてはいないが・・・どこかの組織では、ゾンビの研究が完成したことは知っていた
俺は、ぞっとした
なんで、こんな写メが俺の携帯に送られてきた？
もしかして、俺は見張られているのかも知れない・・・
そして、俺はこの写メに夢中になった・・・
だが、その十分後に新たなメールが来た
今度はメールに本文が書いてあった

「ごらんになりましたか？
もしご覧になったのなら
次の携帯番号まで・・・」
俺はその番号にすぐかけた
だが、一向に出ない・・・
もう一回かけようとしたら・・・
メールが来た
「電話ありがとうございます」
それだけだ・・・と思っていたがこのメールには動画が張り付けられていた
俺はその動画を見た・・・
そこには、ゾンビが女子高生らしき人を食べている姿が映っていた・・・
だが、俺にはその食べられている女子高生に見覚えがあった・・・
いや、それだけじゃない。近くに映っているスーパーにも見覚えがある
わかった・・・
この子は・・・なんで今まで気が付かなかったのだろう
この子は隣の家の娘さんだ・・・
たまに会ってしゃべったりもするから・・・知っていたけど
なら、このメールはもうこの子が死んだって言うメールなのか？
だが、死んだなんて隣の人から聞いたことなんてない
なら、今日のメールか？
しかし、このメールにはスーパーが閉まっている
確かこのスーパーは午前2時ぐらいまで開いている
クソ！考えても訳が分からなくなるだけか・・・
仕方ない・・・スーパーまで行くか・・・

# ゾンビと女子高生

――――――スーパー前――――――
もうそろそろ午前2時だな・・・
俺は写真の場所にいた
ここなら何かあるかと思ったが血の跡はなかった
周りを確認したが今は誰もいない
そして、そう思っている内に
スーパーが閉まった
女子高性の声：「でさー」
信吾：「！？」
娘：「あ～確かに」
ウソだろ！？
俺は周りを確認すると向こうの方から女の子が数人あるいてくるのがわかった
まさか、来るのか・・・
いや、あの子も女子高生だしこんな時間に外出するかもしれない
でも、もしかしたらあの写真通りにゾンビが来るかも知れない・・・
とりあえず、声はかけておくか・・・
信吾：「お～い」
娘：「あ！おじさんどうしたの？」
信吾：「いや、ここらへんで待ち合わせしてるから、待っていたんだが」
娘：「あ～まさか、彼女？」
え？何で俺の後ろに指刺してんだ？
・・・っチ！！
俺はとっさに振り向いた・・・
そこには、スーツの女性がいた・・・
いや、スーツの女性だけじゃない

周りを確認すると１０人近くの人数がこっちによってきている
やばい、囲まれたか！
娘：「ど～も、こんにちは！」
俺をすり抜けて、挨拶をした・・・その瞬間
スーツの女性：「ああ・・・がああああああ！！」
娘が首元を噛まれた
娘：「きゃあああ！！痛い、助けて！！」
娘は助けを求めているだが・・・
俺は、もう感じていた・・・
この子が・・・助からないと
女子高生：「ちょっと！！あなた、すみませんがあの子を助けてください！！」
信吾：「それは、無理」
女子高生：「なんでですか！！？」
信吾：「あと、数秒かな・・・」
女子高生：「いったなにが・・・」
さっきまで、もがいていた子が急に動かなくなった・・・
女子高生：「いや！いやあああああああ」
信吾：「おい！！俺のそばを離れるな！絶対だぞ！！」
女子高生：「は、はい！」
信吾：「さて・・・ここからどうやって逃げようかな・・・」
女子高生？：「戦わないんですか？」
信吾：「勝てるわけないだろ・・・武器もなんもないのに」
女子高生？：「じゃあ、どうやってここから逃げるんですか！？」
もう、周りを見れば俺達を囲むように・・・ゾンビどもが来ている
クソ！俺一人ならこんなの楽勝なのに・・・
そう考えいる内に、一人のゾンビが襲い掛かってきた！
信吾：「くんじゃねえよ！！」
俺は、ゾンビに膝蹴りを入れ、そのあとに顔面を地面に叩き付けた
そして、最後に頭を踏み潰した・・・

――グシャ
信吾：「これで、一人はおわ・・・」
――ガシ！！
ウソだろ！！
なんで、こいつ脳をつぶしたのに・・・
動けるんだ！？
信吾：「っチ！！」
俺は捕まれた足を動かした
そしたら、すぐに取れた
信吾：「こいつら、まさか脳つぶしても動くのか？」
女子高生：「なんで？ゲームなら動かなくなるのに」
信吾：「お！？お前詳しいな・・・」
女子高生：「誰でも、知っていますよこれくらいのことは」
さて、冗談をこれくらいにしておかないと・・・
マジでピンチだ
一人だけ脳をつぶしたけどまだまだいる・・・
しかも、つぶした奴はまだ動く・・・
信吾：「絶体絶命かな、これは・・・」

## ゾンビと作戦

さて、ここで選択だ・・・
俺は命が惜しいなら、このままゾンビを2，3体倒して逃げればいい
でも、この子達守るとするなら、命の保証はできない・・・
・・・俺は考えた末に・・・
この子達を一時的に守ることを優先にした
信吾：「おい！！女子高生ども！！そこのスーパーに行け！！」
女子高性：「そんな、こと言われても無理です！最低でも二人のゾンビを相手にしないと・・・」
信吾：「それぐらいは、俺がやる！！・・・」
俺はそう言って、スーパーへの道を作った
女子高生：「・・・すごい」
信吾：「早く行け！！長くは作れないぞ！！」
女子高生？：「は、はいありがとうございます」
よし、あの子たちはこれで大丈夫だと思う・・・
さて、俺はどうやって逃げよう・・・
俺も、スーパーへ逃げるって選択肢があるんだが・・・
それだと・・・あの子たちが危険になるからだめだ
ならもう、いっそのこと、一旦こいつらを引き付けて一気に倒すか
それとも、地道に一体ずつ動きを止めるか・・・
待てよ・・・よく考えたら俺はこのゾンビ達の殺し方を知らない・・・
クソ、仕方ないこいつらを・・・俺の家に引き寄せて殺し方を探る
しかねえか
なら、ゾンビを誘導する必要があるな・・・
こいつらゾンビを引き付けるには、簡単だ
ゾンビは目は使わないが・・・鼻がよくなっていた
そして、こいつらの一番の目的は食べること

なら、匂いが強い方に来る・・・
よし！！とりあえずは、この作戦で行こう！

## ゾンビと匂い

信吾：「はあはあ、ここまで、ちゃんとついてきてるのか？」
俺は後ろを振り返って確かめてみた
・・・ちゃんとゾンビがついてきてる
信吾：「とりあえずは、このまま家に行くしかないよな」
信吾：「それにしても、この服そんなにくさいかな？」
俺は、引き付ける方法として自分の血を服にしみこませた
そしたら、ゾンビどもはこっちを向き追いかけてきた
それは、よかったんだが・・・
微妙に自分ってそんなに匂うの？って疑問に思う
おっと、そう考えている内に家につい・・・・
ウソだろ？
なんで？
こんなところにまで・・・
ゾンビがいるんだ？
しかも、十体とかそんな数じゃない・・・
見渡す限りに・・・ゾンビがいる
やばい・・・
さすがに、きついな
このまま、家に突っ込んでも多分死ぬと思う・・・
なら、ここは
逃げるが勝ち！！
俺は逃げた・・・
走って逃げた
そして、
――――――――２０分後――――――
信吾：「はあはあ、ここまで、逃げればいいだろ」
思ったよりもゾンビの足が速くなかったから逃げ切れた・・・

とりあえず、宿をとらないと・・・
このまま外で野宿したら多分食われるし
お！こんなところに孤児院がある・・・
仕方ない、今日だけここに泊まらせてもらうか
俺はそう思ってインターホンを鳴らした
しかし、おおきな孤児院だな・・・
女性：「はーい」
信吾：「あ、すみません」

## ゾンビとスラッシャー

女性：「お断りします！！」
――――バン！！
・・・世間は冷たい・・・
っと考えている場合じゃない！！
でも、このあたりでここ以外に・・・
そう思った時だった
女性：「きゃあああああ！！！」
悲鳴！！クソ、ゾンビが来たのか？
信吾：「大丈夫ですか！？」
俺は扉をたたいたそしたら・・・
中から開けてくれた
子供：「助けて！！」
泣いている・・・中で何かが起こったな・・・
信吾：「よし、任せろ！」
俺は悲鳴の方向と血の匂いを頼りに向かった
・・・多分もう一人は確執に死んでると思いながら
信吾：「この先かな？」
そこは、みんなで食堂だった・・・
ゾンビさえいなければ今頃・・・
俺はあたりを見回した・・・その先には二人の女性がモップを持って男のゾンビと対峙している
女性：「来ないでください！！」
女性は足を震えている
だが、そんなこと男のゾンビには関係なく・・・
今にもかみつきそうな感じで歩いていく・・・
俺は走って男のゾンビの体を力限りに蹴った！！
ゾンビは吹っ飛んだが・・・ダメージは全くない

信吾：「おい！！さっさと逃げろ！！」
俺は女性に呼びかけた
女性：「駄目です、この扉の向こうには子供が・・・」
信吾：「なら、そいつらを連れて二階に行け！！」
女性：「は、はい！！」
女性は後ろに会った扉を開け中から子供数人を連れていこうとした・・・
その瞬間・・・最悪のことが起きた
――――――――バリン！！！
窓が割れる音がした・・・
その割れた方向のは・・・
ゾンビの進化した・・・スラッシャーがいた
スラッシャーとはゾンビが一定の期間血を出し続ければごくまれに進化するゾンビ
スラッシャーの両手は骨が尖った状態で向き出ている
それがに切られると血が当分止まらなくなる
これは実体験だから言える・・・こいつは相手にはしてはいけない！！
だけど・・・だけど・・・俺が戦わないと・・・ここにいる奴らは全員死ぬ・・・
信吾：「やるしかないか・・・・・」
俺は覚悟を決めてスラッシャーに近くにあったナイフを持ち攻撃した
死ぬ覚悟で向かった・・・少しでも足止めができれば・・・そう思っていた
だが、現実は非常だった・・・
スラッシャー：「うがああ！！！」
時が止まった・・・俺にはそう感じた・・・だってスラッシャーの手が俺の目の前にある・・・ちょっとでも動けば当たりそうな距離に・・・
死んだと思った・・・もう無理だ・・・何もできない・・・実際に

体が動かないしな・・・
ごめんな・・・守ることができなくて・・・任せろって言ったのにな・・・
次の瞬間・・・・・俺は・・・死んだ・・・

ここはどこだ？確か孤児院で死んだじゃなかったけ？
俺は水槽みたいなのに入れられていた・・・ここがどこだか分らなかった
しかし、なぜ俺が生きているかがわからなかった・・・
近くに誰もいないな？
俺は確認して、水槽をぶち破った
――――ガッシャン！！
信吾：「ふう・・・ここは本当にどこだ？研究所ぽいが・・・」

## ゾンビと研究所

――――ウーウーウー
警報機：「何者かが侵入した模様、速やかに排除せよ。繰り返す、何者かが侵入した模様、速やかに・・・・・」
っチ！！まさか、さっき出るために壊した水槽のせいか？
俺は近くにあった作業服を着て逃げた・・・そして、逃げた先にはアサルトライフルを持った兵士らしきものがいた・・・
兵士：「いたぞ！！」
信吾：「クソ！！」
俺は近くにあった机を盾にして弾丸から身を守った
ほんとにここどこなんだよ！！
俺は机を盾にしながら移動した・・・そして・・・・
――――ガン！！
信吾：「クソ！！行き止まりか！！」
俺は通路の行き止まりにいた・・・後ろから足音が聞こえる・・・
はあ、ここで俺は終わるのか？・・・別のそれもいいかな？俺だって結構生きてきたんだし・・・でもなあ、１８歳で死ぬのはなあ・・・
俺はこんなピンチなのにのんきなことを考えていた
兵士：「動くな！！」
後ろから声が聞こえる・・・終わった・・・
そう思った時、違和感に俺は気が付いた・・・
あれ？あの兵士の天井・・・へこんでないか？
俺はさっき思いっきり蹴ったのに、傷一つつかなかった頑丈なのに・・・どうして？
俺は一つの可能性を試した・・・
信吾：「なあ、お前ら、生き残りたいよな？」
兵士：「ああ、お前はここで俺達が殺すがな」

信吾：「そうか、一つ教えてやるよ・・・お前たちの天井を見ろ」
兵士：「その隙に脱出か？」
信吾：「いいや？お前らの誰でもいいみな？」
そう言うと、一人の兵士が自分の頭上を見た・・・そして
兵士：「おい！！ここから出るぞ！！！」
兵士：「？なぜだ」
兵士：「いいから！！はや・・・」
――――ドーーーン
天井が崩れた・・・兵士たちは多分死んだ全員・・・
砂埃が待っている・・・その中で一つだけ、影が動いている・・・
？：「ウゴアアアアアアアアア！！！！！！！！！！」
信吾：「誰だかしらねえが感謝するぜ！！」
俺は横で吠えている奴を足元に転がってきたアサルトライフルで撃った
？：「がああああああああ！！」
信吾：「やっぱり、聞かねえか・・・」
俺は１０発ぐらい撃った後、撃つのをやめた・・・そして、砂埃がなくなり・・・その姿をあらわした・・・・

## ゾンビと研究所（後書き）

結構ゾンビネタ書くのって難しいですね（^__^・）

## ゾンビとガトリングのスラッシャー

・・・その姿は・・・スラッシャーに似ていたが違う・・・なぜなら、スラッシャーは・・・両腕がガトリングじゃない！！

――――キュウーーーールーーン

やばい！！！俺はとっさに近づき、両腕を上に蹴った

――――ガガガッガガガ！！！

ウ・・ソ・・・だろ？上には穴が開いていた・・・こいつが落ちてきた穴だが・・・その先には・・・こいつに似ているのが・・・５体ほど・・・いた

信吾：「うおおおおおおおおお！！！」

俺は全速力で走った・・・どこかに出口がないかと・・・だが・・・

信吾：「クソ！！ここも行き止まりか！！！」

クソ！！！クソ！！！もう、俺には手が残ってないのか！？

後ろから足音が聞こえる・・・俺の手元にはアサルトライフルが残り１０発ほど・・・

勝てない・・・どんな手を使っても絶対に・・・

・・・また、諦めないといけないのか？さっきみたいな奇跡は多分もう起きないしな・・・

俺は・・・覚悟を決めた・・・・・・あの、両手がガトリングのスラッシャーと格闘・・・することを

スラッシャー？：「ウゴオオオオオオオオオオ！！！！」

信吾：「来たか・・・・・・ウオオオオオオオオオオオオおお！！！！！」

俺は、スラッシャー？の腕を狙った・・・あいつが乱射してほかのやつを殺そうと思った・・・だが・・・

信吾：「ガアアアアアアア！！！！」

なんだ！？今の・・・俺の声か？

自分で行っておきながらおかしな声が出た・・・まるで、あいつらと同じ化け物のような声が・・・

その時、俺の右腕がスラッシャーの左腕に当たった・・・そして、捕まえようとした・・・けど、俺の予想をはるかに超えることが起きた・・・

――――ブチ

信吾：「え？」

思わず変な声が出た・・・

そして・・・・

スラッシャー？：「ガアアアアアアアアアアアアア！！！！」

スラッシャー？がもがいている・・・左腕を失って・・・・・

そして、失った左腕は・・・俺が持っている・・・・・

信吾：「はは・・・ウソだろ？」

本日何回目かの「ウソだろ」が出た・・・・・

だってさ、俺は引きちぎれるほど力を入れてないのに・・・・・・

俺は、この時やっと気が付いた・・・・

なぜ？水の中で酸素マスクを着けずに生きていたかを・・・

なぜ？俺が生きているかを・・・

答えは簡単だ・・・・・俺は・・・・・

信吾：「ゾンビだ・・・・・」

## ゾンビとカラス

――――――ドーーーーーーーーン
俺はこの研究所みたいなのを爆破した・・・
あんな施設があってはいけない・・・・俺みたいなのを増やしてはいけない・・・
俺は復讐を誓った・・・俺をこんな体にした奴に・・・こんな研究をしている奴を・・・皆殺しにしてやると・・・・
久しぶりに外に出た気がする・・・俺は一体どれくらいの間あの水槽の中にいたのだろう・・・
とりあえず、今日が何日かが知りたい・・・確か、俺が死んだ日が大体２０００年の４月だったな・・・
俺はとにかく、車を待つことにした・・・
――――――――７時間後――――――――
え～っとみ・・・み・・・み・・・クソ！！！もうない！！！
俺は一人しりとりをしていた・・・
むなしい・・・っと落ち込んでいる場合じゃなかった。それにしても、ほんとに車一台も通らないな・・・
仕方ない、走るか
俺は走った・・・
――――――――３０分後――――――――
・・・こんな近くにあったんだ・・・町・・・・・
はあ、もう日が暮れてきたな・・・まあ、悔やんでも仕方ない
俺は町に入り口に行った・・・・・それが、地獄の入り口とも知らずに・・・
お！喫茶店ある・・・あ～でも、今の俺金ないんだよなあ～仕方ないスルーするか
とにかく、そこら辺の人に聞くか・・・
信吾：「すみません？今日何年の何日ですか？」

女生徒：「ええ～っと確か、３０００年の5月7日だったと思います」
え？今なんて言った？３０００年の・・・・・３０００年？ウソだろ？
俺は１０００年も水槽で生きていたのか？いや、ゾンビだから死んでいるか・・・
信吾：「すみません、もう一つだけ」
女生徒：「早くしてくださいね？もうすぐ、夜になるので」
信吾：「わか・・・夜？」
女生徒：「早く、あなたも家に帰るか銃を持った方がいいですよ？ゾンビがきます」
信吾：「ゾンビ！？」
女生徒：「驚くことじゃないでしょ？」
信吾：「ありがとうございました！！！」
俺はこの場から逃げた・・・怖くて・・・そして、ゾンビのことを驚かないことが一番恐かった・・・
信吾：「まさか、俺が１０００年いない、内に・・・ゾンビは人を食いって来たってことか・・・」
はあ、この場合人間が生きていたことが驚きだな・・・まさか、一般人に銃を持たせるのを許してるとは
信吾：「ん？なんだあれ・・・」
俺は夕日の方に向いた・・・ほかの人も見ている・・・
夕日の陰でよくわからないが・・・何かが空を飛んでいることがわかる・・・
・・・・・・・
信吾：「みんな！！！早く室内に行け！！！！」
俺はわかった・・・あれは、カラスだ・・・・・
あれを防ぐ方法は火炎放射で焼くか・・・それとも、莫大な弾を使って全部撃ち落とす。それか、カラスが入りにくい場所に逃げるか・・・

だから、町などでは室内に入って何とかするのが一番いい・・・
だが、それを知らないのか・・・町の人の反応は・・・・・
無視・・・・・だれも、もう夕日の方を向いていない・・・
多分この人たちは・・・ゾンビしか見たことない・・・人間の・・・・
やばい・・・俺は逃げないと・・・何とかして生き残らないと・・・・
その時、一匹のカラスが・・・・・一人の住人を襲った・・・・・

## ゾンビと決意

！！！！！
俺はとっさに研究所で拾った、拳銃でカラスを撃った
――――バァン、バァン
２発撃った・・・だが、カラスは襲うのをやめない・・・・弾は当たっているのに・・・
女の子：「きゃあああああ！！！！！」
放送機：「警戒体制のレベルを１まで上げます！！！住民の皆さんは早く避難場所に戻ってください！！！！！」
――――うあああああああああああ！！！
クソ！！！住民はみんなパニックになってやがる！！！
避難場所はどこだ？
男：「早く避難しろ！！こっちだ！！！」
あっちか！！！俺は移動しようとした・・・その時、気が付いたみんなが避難する中で一人だけ立ち止まって・・・「おかあさん、どこぉ？」と泣いてる・・・女の子がいることに・・・
信吾：「・・・・ちくしょおおおおお！！！」
俺は・・・助けることにした・・・
信吾：「おかあさんを探してやる！！！だから、こっちに来い！！！」
女の子：「へ？」
俺は女の子を抱えたそして、避難場所に逃げようとした・・・が
――――ガシャーーーン
閉まった・・・避難場所の入り口が閉まった
？：「ガアアアアアアアアアアアアア！！」
！？
なんだ？またスラッシャーか！？

俺は声がする方に向いた・・・だが、そこには何もなかった・・・
？：「ガアアアアアア！！！」
―――――ブン！！
目の前を何かが・・・・何かがいる・・・俺は片手で女の子を抱いて・・・一歩一歩・・・後ろに下がった・・・
女の子：「ねえ、私死ぬの？」
！！！！！！！！！！！！！！
俺は・・・・・スラッシャーと戦った時・・・・・未知の化け物と戦った時より・・・衝撃が走った・・・・・
なぜなら・・・・こんな小さい・・・子供が・・・・死ぬと言った・・・
親離れも・・・親に甘えてもいい年頃の子供が・・・死の瀬戸際にいる・・・・・
俺はこの時、心の中で決めた・・・・・・・・俺が、俺が・・・復讐だけじゃない・・・俺がこの世界を・・・・・この世界を変えてやると・・・
――――ブン
何かが俺に当たろうとしていることが分かった・・・
俺は拳銃を持っている右手でその何かを思いっきり殴った！！！
不思議と何かがどこにいるかが俺には分かった
？：「ウガ、ガア。」
声がしなくなった・・・動かなくなったみたいだ
よし！！今のうち・・・ってどこに行けないいんだ？
周りはカラスで住人を食っている・・・
避難場所は閉じている・・・
逃げ場がない・・・
女の子：「ねえねえ、私の家行ってくれない？」
信吾：「何か忘れものか？」
女の子：「ううん、私の家から避難場所に行けるし、そこからこの町の外にも行けるから」

信吾：「よし！！行くぞ」
俺はこの子の家に行った
――――――――――地下避難場所――――――――――
信吾：「おーい、誰かいないのか？」
俺は地下で懐中電灯を持って歩いてた
信吾：「方向こっちであってるんだよな？」
女の子：「うん！」
元気だな・・・ほんとさっきまで死ぬ一歩手目にいたなんて思えないな・・・・
俺はそう思った
――――――――――中央広場――――――――――
女性：「あ！佐奈（さな）ちゃん！！」
佐奈：「おかあさん！！」
俺は抱えていた女の子・・・佐奈を下して母親の元に行かせた
母親：「佐奈ちゃん！！佐奈ちゃん！！！」
佐奈：「おかあああさん！！！」
佐奈の母親は泣いている・・・負けずと佐奈も・・・
感動的な場面だな・・・・・
信吾：「ふう、よかったよかった」
？：「ありがとう。感謝するよ」
信吾：「ん？あんた誰だ？」
？：「私の名は守（まもる）ここの警備長だ」
信吾：「そうか」
守：「ありがとう、また一人失ったとみんな思っていたよ・・・でも君が助けてくれたおかげで」
信吾：「いいよ、礼を言われなくても・・・俺がしたかったんだから」
守：「そうか」
信吾：「って、これからどうするんだ？」
守：「ここから、地下鉄で町の郊外に出る。そして、あたらしい街

にいくよ」

信吾：「へえ～」

そう言った時だった・・・・・・

## ゾンビとゾンビの力

――――――グウ～～～
っげ！
俺の腹が鳴った・・・・・
守：「ははっは、こっちにきたまえご飯を用意するよ」
信吾：「すまねえな」
守：「さあ、こっちだ」
俺は飯を食わせてもらった。そして、食わせてもらいながらも今この場所がどこか・・・なぜ、ゾンビが一般人に知られているのかを教えてもらった・・・
俺が１０００年前の人間だというのを隠して・・・
守：「さて、これから君はどうするんだい？」
信吾：「ん？」
守：「いや、君がどこにも行かないならここに残って町のガードマンになってほしいんだが・・・」
信吾：「悪いが、それは無理だ俺にはやることがある・・・」
守：「そうか・・・」
信吾：「まあ、次の町に行くまでは一緒だし、その間だけでも守ってやるよ。できるだけな」
守：「ありがたい・・・なら、この銃を持っておいてくれ」
信吾：「俺には、自分のがあるんだが」
守：「はは、でもこの銃がないと多分君は死ぬと思うよ？」
信吾：「？」
守：「この銃はゾンビの動きを一定の時間だけ完璧に動けなくする、弾が６発だけ入っている」
信吾：「６発か・・・」
守：「ああ、だから使いどころだけは間違わないでくれ」
信吾：「りょーかい」

俺は受け取った銃を胸の内ポケットに入れた
守：「よし、多分みんなも食べたと思うしそろそろ、行きたいんだが」
信吾：「なら、俺が外の先導する・・・多分一番戦いに慣れてる」
守：「いや、それは駄目だ」
信吾：「どうしてだ？」
守：「君は客人だ。だから、私とこの町の強い男たちを連れて行ってくる」
信吾：「お前が残れよ」
守：「大丈夫、僕だって訓練は受けたんだ」
信吾：「訓練と実践では大きな違いがあるぞ？」
守：「それでも、やらないといけない時もある」
はあ、こいつ結構頑固だな・・・・・
仕方ない俺もついて行った方がいいか・・・」
信吾：「じゃあ、ここはお互いの意見を尊重し・・・」
――――――ガーーーーン
！？
信吾：「なんだ？今の音！！」
守：「もう、壊されたか！！」
信吾：「・・・・・おい！！お前らはさっさとお前らは地下鉄に乗って行け！！」
守：「それじゃあ、君が・・・」
信吾：「誰かがここに残らないといけねえだろ！！」
守：「それは僕が・・・・」
信吾：「俺も後から追う！！待たせとけよ？」
守：「・・・わかった！！」
守は、地下鉄がある方向に走って行った・・・
俺はさっき音が鳴った場所に行った・・・
――――――――地下鉄避難入口――――――――
スラッシャー：「ガアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！」

佐奈：「きゃあああああああ！！！」
お母さん：「佐奈ちゃん！！」
――――――バアン
スラッシャー：「ガ！？」
信吾：「っチ！！もうここまで来てたか！！」
俺は入ってきた場所を見た・・・・・さらに、周りを見た・・・・・
周りには避難に遅れが数十人・・・俺の目の前にはスラッシャーが
3体・・・・・
俺の後ろには、佐奈とおかあさんそして・・・地下鉄に入るための
この場所唯一の逃げ道・・・・・
俺はまた・・・覚悟を決めた・・・・
そして・・・俺はスラッシャー3体相手に・・・・・素手で挑むこ
とにした・・・・・
男：「あんた！何してるんだ。早く武器を・・・・」
信吾：「おれのことは心配するな！！自分のこと、女子供のことだ
け考えろ！！！」
男：「う！」
俺は男にそう言って・・・スラッシャーにゆっくりと近づいた・・・
・・
スラッシャー：「ガア！！ガアアアアアアアアアア！！！！」
そのうちの一体が俺に対して腕を振り回してきた・・・・・俺はそ
の手を・・・・・
指二本で受けた・・・・・そして、腕の刃を下に叩き割った
スラッシャー：「ウガアアアアアアアアアア！！！！！！！！」
スラッシャーが痛がっている・・・銃ではそんなに痛がっていなか
ったのに・・・・・
俺は次にスラッシャーの腹をある程度力を入れて殴った・・・・・
そして、スラッシャーの一体は動かなくなった

## ゾンビと食べ物・・・

――――――――ざわざわ
：「おい、あの人一発でスラッシャーを」
：「ええ、銃を撃っても動きさえ止められないのに・・・」
：「ほんとに、人間なのか？」
周りが騒ぎ始めている・・・無理もない・・・俺でさえ殺せるとは思わなかった・・・・
と言うかこれ死んでいるのか？
本気で殴れば腹を突き抜けるじゃ…
まあ、いいや。人間さえ守れるんなら・・・・・俺は人じゃない・・・

スラッシャー：「ガアアアアアア！！！！」
スラッシャー：「ウガアアアアアアアアアア！！！！！！！！」
もう、2体が来た・・・・・
目の錯覚か、動きがさっきより遅い・・・・これなら、一体ずつ倒しても時間がかからない・・・逃げる時間は稼げる・・・・・
俺は一番近いやつに蹴りを入れようとしたその時・・・・・・さっき殴ったスラッシャーがゆっくりと立ち上った・・・・・
そして・・・そいつは俺に襲い掛かってきた2体を食べた・・・・・
一瞬で、俺の目にも止まらない速さで・・・・・
――――――――グシャ、グシャ、ゴック・・・・・
食べ終わった・・・その間、5秒程度・・・・・多分この速さならここにいる奴全員3秒もかからない内に食われる・・・・・・
俺がこいつを蹴り飛ばした・・・
だが、こいつは蹴りはできたが飛ばなかった・・・・・
よく見るとこいつ・・・・・だんだんデカくなってきてる・・・・・
最初は人2人ぐらいのスラッシャーだがこいつは3，4人ぐらいまでデカくなってやがる・・・・・・

まさか、共食いをして進化をしているのか？ゾンビからスラッシャーになったように・・・・・
なら、進化する前にやらないと！！！
もし、こいつが進化したなら俺は負ける・・・ゾンビ達の進化は進化前の約２０倍・・・こいつが進化したら・・・・・待てよ？こいつ今さっきよりも早く動いていた・・・・・なら進化は始まっている！！！！
止められない・・・・・・倒せもしない・・・・・・・・・
信吾：「お前ら！！！！！！！ここから逃げろ！！！！！！！」
俺は叫んだ・・・・・勝てないとわかったから・・・・・・一刻も早くここにいる奴を逃がさないと思ったから・・・・・・
スラッシャー：「ア、ガア、グギ・・・・・・ふう」
目の前のスラッシャーが「ふう」と言った・・・・・・
俺は驚いた、ゾンビが日本語をしゃべっている？
そして、皮がはがれて人になった・・・
スラッシャー：「あ～腹減った・・・・・お！そこのお前ちょっと食わせろ」
そう言って、人を食べ・・・・・・・た
一瞬で動いた、見えたけど・・・・・・
スラッシャー：「食わないよりましか・・・・・よくよく、見ると一人はごちそうだ・・・・・・」
そう言って俺を見た。

## ゾンビと食べ物・・・（後書き）

最近のおすすめゲームってあります？
できれば、ＰＳＰかＰＳ３がいいです

## ゾンビと本能

――――――チャキ
俺は銃を構えた・・・・・殴りあって勝てないと思った・・・・・
スラッシャー：「はは、なんだそのおもちゃ？死人なら死人の戦い方があるだろ？」
信吾：「俺は死んでねえよ」
スラッシャー：「そういや、名前は？」
信吾：「信吾・・・」
スラッシャー：「俺の名は、ゾータ・・・今から５００年前の元人間だ」
信吾：「なんで、死んだ年を知ってるんだ？」
ゾータ：「お前は覚えてなかったのか？ゾンビの記憶・・・・」
信吾：「お前は・・・覚えているのか？」
ゾータ：「覚えてる・・・人を食った時・・・進化するとき・・・・お前に殴られて進化したのもな・・・・」
信吾：「ック・・・・・」
ゾータ：「いいぜ、てめえが恐怖になっているのもおもしれえ」
信吾：「変態が・・・」
ゾータ：「まあいいじゃねえか。さあ、殺させな・・・・」
守：「信吾！！これ使ってくれ！！！」
後ろから守が何か投げてきた。俺はそれを受け取った。投げてきたものは刀
ゾータ：「死ねえええええ！！！！」
俺は無言で鞘を抜き・・・・・刀身で切った。ゾータの首を・・・・・
ゾータ：「ガ・・・・・甘いな」
信吾：「それぐらいわかってる」
俺は瞬時にもう一回切りつけた・・・・今度は右手・・・次に右足

ゾータ：「調子に乗るな！！！！」
信吾：「な！！！」
ゾータは口で刀を受け止め・・・・俺を蹴り飛ばした
信吾：「ッガ、ッハ」
息ができない・・・苦しい・・・痛い・・・・・体が重い・・・・
ゾータ：「今度はこっちがやってやるよ・・・・・食べやすくシテヤル！！！」
佐奈：「やめて！！！！」
佐奈がゾータの足にしがみついて動きを止めた・・・
佐奈は必死に足にしがみついて止めていたがその姿をゾータは上から・・・切り付け

！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！
！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！
！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！
！！！！！！！！！！！！

確か俺って１０００年前の人間だ・・・・・・あいつは、５００年・・・・・
信吾：「年上ヲナメルナ！！！！！！」
俺は切り付けられそうになった佐奈を抱えていた・・・・知らない内に・・・・・
自分がやったと自覚ができない・・・・・今だって「大丈夫か？」と言いたいがうまく言えない・・・・・・
佐奈：「信吾・・・・・？」
俺は佐奈を無言で母親の元に渡した・・・・
そして、ゾータの方向に振り向き・・・・・本能の従い・・・・・ゾンビの力を使った・・・・

## ゾンビとその殺し方

信吾：「ガアアアアアアアア！！！！！！！！！１」
人じゃない声がした・・・・・
ゾータは驚いている・・・いや、周りのみんなが驚いている・・・
俺がスラッシャーみたいな声で吠えたから・・・
ゾータ：「俺だって、ゾンビだ！！！！！」
信吾：「ガアアアア！！！」
俺は飛びかかってきたゾータを右手で殴った・・・
ゾータ：「ガ、グガア」
殴った腹に俺の拳の穴が開いた・・・
ゾータ：「ま、まだ、まだだ！！！」
今度はゾータが殴ってきた・・・俺はそれを避けずに受けとめた
ゾータ：「ウオオオオオオオオオ！！！！！」
俺の顔を殴り続けている・・・だが、俺には痛みがない・・・
俺にはゾータが無駄なことをしているにしか見えない・・・・
ゾータ：「はあはあ、どうだ！！参ったか！！」
信吾：「・・・・・・」
ゾータ：「何も言えねえみたいだな！！！」
そう言ってゾータは近くにあった拳銃で俺の顔を撃った・・・
ーーーーバアン
俺はそれを直撃で受けた・・・・・至近距離で撃たれたのを・・・・
だが、顔に一つも傷がない・・・
ゾータ：「はあ、ウソだろ？」
信吾：「一つ聞きたい」
ゾータ：「なんだ？」
信吾：「お前はどう殺せば死ぬ？」
ゾータ：「・・・・はあ、もういいよ殺せ・・・」
信吾：「その方法を教えろ」

ゾータはニヤリと笑った・・・・・
ゾータ：「おまえは俺達が死なないこと知ってるのか・・・」
信吾：「まあな」
ゾータ：「教えてやるよ。俺の存在そのものを殺せ」
信吾：「どういうことだ？」
ゾータ：「簡単だ、俺を焼き、凍らせ、最後に塩水に浸せば・・・溶ける」
信吾：「それでいいのか？」
ゾータ：「動きを止めるのは色々あるが、殺せるのはこれだけだ」
信吾：「溶けたのはどうするんだ？」
ゾータ：「そこら辺の肥料にでもしろ、安心しな人体に影響はない」
信吾：「話を聞いてる限りじゃ死んでないな」
ゾータ：「ああ、俺達は死ぬことを許されていない」
信吾：「そうか・・・」
ゾータ：「じゃあ・・・・・最後にいいか？」
信吾：「なんだ？」
ゾータ：「おやすみ・・・・・・」
信吾：「ああ、おやすみ」
俺はゾータを一瞬で燃やした、方法は秘密だ・・・
そして、凍らし、塩水に浸した・・・
みるみる、ゾータの体が溶けていく・・・
（俺もいずれかはこうなるんだよな・・・）
死んでゾンビになったものは死ぬことを許されていない・・・
死んだ方がどれほど、楽なのかがよくわかる・・・
永遠の命もいらない・・・ほしいのはただ死ぬこと・・・
それが、ゾンビになったものの・・・最後に思うこと・・・

## ゾンビと誓い

俺は塩水になった、ゾータを小さな瓶に入れた・・・
こいつをどこで捨てるか、考えておかないとな・・・
さて、ここからどうしよう？
周りの人たちは俺を見ておびえて・・・
佐奈：「すごーい」
信吾：「は？」
思わず変な声が出た
佐奈：「だって、信吾が助けてくれたんでしょ！？」
佐奈が俺に抱き着いてきた・・・
・・・褒められたのか？
俺の思考がついてこない。だって、目の前に化け物がいるのに・・・
周りの人たちはまだ、おびえている・・
なのに、なんで佐奈は俺に抱き着いてくるんだ？
守：「・・・信吾、ちょっと来てくれないか？」
信吾：「ああ」
俺はうなずき、守の後について行った・・・
その時、佐奈が俺についてくるって聞かなかったから、隣には佐奈がいる・・・
佐奈のお母さんもいるが俺に対していい印象を持っていないっぽいし
守は守で何考えているかがわからない・・・
信吾：「はあ」
思わずため息が出た・・・
どうしようかな、これから親玉の場所がわかればそっこく殺すんだが、わからないから情報を集めないといけないし、ここにいる人たちをほっておくのもなんだし
守：「ついたな・・・みんな二人っきりにしてくれ」
着いた場所は、牢獄・・・

いや、昔牢獄として使われていたであろう場所に来た
信吾：「どうするんだ？おれを」
2人っきりになった後に聞いた
守：「別にどうもしない、だが俺達人間を殺すなら信吾を倒さないといけない」
信吾：「遠慮せずに言えよ、俺が怖いって」
守：「大丈夫、怖いとは思っていない・・・」
信吾：「は？」
変な声が出た、だって怖くないってどんだけ度胸あんだよ
守：「だって、君は僕たちを助けてくれた・・・恩人に怖いなんて失礼だろ？」
信吾：「・・・・・はは」
笑えるな・・・こんな人間もいるんだな・・・
よし、決めた今だけこいつら守ってやる・・・
いや、人類すべて俺が救い出してやる
そう、俺は心に誓った・・・

## ゾンビと信号弾

守：「それで、本題だが」
信吾：「なんだ？」
守：「隠れながら、僕たちについてきてくれないか？」
信吾：「なんで隠れながら・・・そうか、確かにあの後だと、怖がるやつが多いな」
守：「そうだ、だから頼む・・・ずっとじゃなくていい、せめて安定している場所まで・・・」
信吾：「いいよ、別に・・・そのつもりだったからな」
守：「ありがとう・・・後、あの刀は信吾にあげるよ」
信吾：「いいのか？」
守：「僕たちは使う時がないから別にいいよ」
信吾：「そうか・・・なら、ありがたくもらっていく」
俺はそう言って、拳銃を守に渡した・・・
守：「これは？」
信吾：「中には信号弾・・・一発だけ入っているそれを合図に俺はお前らを助ける・・・いいな？」
守：「わかった」
守はうなずき、拳銃をポケットに入れた
そして、俺は元の場所に戻った・・・
佐奈：「信吾！！」
信吾：「うわ！！」
また、抱き着いてきた・・・
はあ、そう言えば俺、佐奈になつかれてるんだよな・・・
信吾：「あれ？おかあさんは？」
周りを見るといない・・・
おかしいな？さっきまでいたのに・・・
佐奈：「多分、厨房にいってない？」

信吾：「そうか」
佐奈：「それより、信吾！！あそぼう！！」
信吾：「・・・すこしだけだぞ？」
そうして、遊ぼうと思っただが・・・
そんな時間はなかった・・・

## ゾンビと一色

：「きゃあああああああ！！」
：「たすけてくれええええ！！！！！」
信吾：「！！？」
悲鳴！？ウソだろ！さっき来たばっかなんだぞ？
信吾：「佐奈隠れて・・・」
佐奈：「お母さん・・・おかあさーん！！」
佐奈は悲鳴のあった方向へ走り出した・・・
しまった！！悲鳴に気をとられすぎていた！！
ちょっと遅れてから俺は佐奈の後を追った・・・
――――――――中央広場――――――――
信吾：「佐奈！！」
俺は佐奈にやっと追いつき持ち上げた
佐奈：「放して、お母さんが・・・」
信吾：「わかっているから落ち着け」
ゾンビ：「ガアアアア！！」
信吾：「っチ！！」
襲ってきたゾンビを蹴とばした・・・
周りを見るとゾンビ一色・・・
やばいな・・・佐奈を抱えながらこの数から逃げるのはちょっときついな・・・
俺は佐奈を片手で抱きながら、少しずつ来た入口の方に歩いた・・・
：「きゃあああ！！！」
：「クソ！！ゾンビがこんなにいるなんて・・・うわ！！」
信吾：「こっから逃げろ！！」
俺は叫んだ・・・けど一向に来る人数が減らない・・・
なぜだ？・・・悲鳴は聞こえているはず・・・まさか！！
信吾：「クソ！！」

俺は入ってくる人の方に走った・・・
途中にいたゾンビはすべて殴ったりけったりして道を開けさせた
：「は！！あなたは・・・」
信吾：「そんなことどうでもいい、なんでこっちにくるんだ！？」
：「仕方ないじゃない！！こっちに・・・ゾンビがいるんだから！！」
信吾：「やっぱりか・・・」
俺のいやな予感は当たった・・・
最悪だ・・・一か所じゃない・・・
今わかっているだけでも2か所・・・
どうする？このままだと・・・
ぜ　ん　め　つ　だ

## ゾンビと地下鉄

（クソ！どこに安全な場所があるんだ！？）
俺は頭の中で探し回った・・・・そして、思い出した・・・
（待てよ・・・確かゾータと戦っている時、守たちは地下鉄で安全を確保しているはず・・・なら）
信吾：「おい！！確か次の町への地下鉄は安全だよな！？」
：「はい、確かめたので・・・」
信吾：「なら、今やることは道を開けなきゃいけねえことか・・・」
俺は佐奈を抱きながら、右手で刀を使い道を開けた
信吾：「さっさと行け！！」
：「あなたはどうするの？」
信吾：「この子を母親を探す、いいから行け！！俺の心配はするな！！」
俺はそう言って、佐奈の母親を探しにゾンビの群れに突っ込んでいった
――――――――――――――――調理室――――――――――――――――
信吾：「っチ！ここにもいないのか！？佐奈ほかに心当たりはないか？」
佐奈：「・・・・・・」
佐奈は無言で首を振った
（どうする？・・・もう避難した方がいいんだが・・・）
多分もう佐奈の母親は死んでいるか、それとも避難しているか・・・
どっちかだ・・・後者の方だったらいいが、死んでいたらゾンビ・・・
せめて、人を殺す前に溶かしてやりたい・・・
俺はそう思いながら調理室を後に、出た
変な匂いにきづかず・・・・
――――――――地下鉄入り口――――――――

守：「こっちだ！！信吾！！」
銃撃の方向から守の声が聞こえた
（とりあえず、佐奈を置いてから後で母親を探すことにしよう）
俺は守の方に走ったその時・・・・
スラッシャー：「ウガアアアアアアアアアア！！！！」
俺と守たちとの間にスラッシャーが5体現れた・・・
信吾：「守！！行け！！こっちはこっちでなんとかする！！」
守：「だが・・」
信吾：「俺はお前らと違う！！女の子一人ぐらい抱えててもこいつらぐらいならなんとかなる！！」
守：「・・・わかった、後から来てくれ！！」
そう言って守たちは地下鉄に乗り込んで出発していった
（クソ！！ああいう風に行ったが結構きついな・・・）
スラッシャーと攻防しながら考えていた・・・
まだ、刀があるから何とかなっているが片手で佐奈をずっと抱えているのはつらい・・・
しかも、5体・・・
無茶な回避をすれば佐奈にどんな影響がでるかわからない
しかも、俺はゾンビだから血で感染する恐れがある・・・
絶対に避けて、なおかつスラッシャーを倒さないといけない・・・
（クソ！！まだ銃があればなんとかなったかもしれないが）
俺はちょっと後悔しながらこの場を離れて行った

## ゾンビと地下鉄（後書き）

最近、面白いゲームがなかなか出ない（＋ｏ＋）

## ゾンビとデブ

――――――――――――――――調理室――――――――――――――――

俺はまたこの場所に戻ってきた・・・
仕方がない、相手は死なない・・・
どんだけ戦っても疲れるだけだ・・・
俺はそう思いながら食料を探すことにした
この先何があるかわからない・・・
ならすこしでも佐奈が食えるものを用意しとかないといけない
おれは・・・まあ、一年位食わなくても大丈夫だろ
そう考えながら冷蔵庫を開けた・・・
中には肉などが入っているが、怖いな・・・
仕方ない缶詰を探すか・・・
佐奈：「ねえ・・・あれってなんだと思う？」
信吾：「ん？」
佐奈が何か指差している・・・
まさか、ゾンビかスラッシャーがもう来たのか？
一応、足を切って置いたけど・・・
だが・・・俺の予想を上回った、答えが・・・現実の答えだった
？：「たす・・・ガア、ウグ・・・け・・・」
なんだ？あれは・・・
外見からではただのデブだ・・・
だが、腹から何か出ている・・・
あれは・・・人？
知らないぞ？こんなやつ・・・・
まさか、スラッシャーの進化後とかか？
俺はそう思い・・・佐奈を抱きしめ、逃げ道を探しながら後ろに下がって行った
母親：「助けて・・・だれ・・・か・・・」

！

？

とっさに佐奈の視界を手でふさいだ・・・

佐奈：「今の声って・・・まさか、おかあさん？」

最悪だ・・・

こんな最後かよ・・・

佐奈の母親はどんどん腹に吸い込まれている・・・

もしかしたら、助けれるかもしれない・・・

だが、あいつに近寄ったらだめだ・・・

俺の本能が警告する・・・

何が起きるかはわからない・・・

けど、絶対に近づくことだけは駄目だ・・・

俺はそう思い、その場を後にした・・・

## ゾンビと「嫌い・・・」

【地下鉄通路】
あの場所からなんとか脱出し、今はゆっくりと地下鉄を歩いている・・・
その間・・・佐奈は・・・
佐奈：「・・・う、ひっく、うう・・・おかあさん・・・」
ずっと泣いていた・・・
俺は自分が嫌いになりそうだ・・・
いや、もうずっと前から嫌いだ・・・
いつだって、俺はあと一歩のところで失敗して、見捨てる・・・
そんな自分が大っ嫌いだ・・・
けど、いつからだろう・・・
俺がこんな臆病になったのは・・・
生まれた頃から？
そうかも知れない・・・
だけど、臆病になるにはなんかきっかけがあったはずだ・・・
無職で・・・一人暮らし・・・
誰も関わりを持ちたくなかった・・・
あの頃・・・学生時代・・・
・・・そうか、わかった・・・
思い出した・・・
俺がこんなふうになったのは・・・
俺のせいで、俺のせいではない・・・
ただ・・・不運が重なっただけ・・・
俺の一番・・・思い出したくない・・・
・・・記憶・・・
それが、俺をゾンビ達に戦うことにした・・・
一番の理由かもしれない・・・

## ゾンビと過去

俺は学生の頃、いじめられていた・・・
引きこもったりもして現実逃避をしたことがある・・・
けど、現実は甘くない・・・
家にいたら、家族の視線が怖い・・・
学校に行くにしても怖い・・・
どっちも嫌だ・・・
そんな毎日だった・・・
けど、ある日・・・
修学旅行で海外に行くことになった・・・
俺はそこで逃げた・・・
幸い、俺は英語などの他国語がしゃべることはできる
・・・逃げるのは失敗だった・・・
だって、人が食われているところを・・・・
俺は逃げた、そして・・・・数時間後目撃をした・・・
路上で・・・昼間・・・
銃を構えている人がいた・・・
その人たちはみんなヘルメットをかぶり顔が見えなかった・・・
服は防弾チョッキのようなもので、革靴を履きみんな戸惑っている・・・
周りには男や女が囲んでいた・・・
そして・・・発砲と同時に一人が食われ・・・
他のみんなは逃げて行った・・・
逃げる方向はみんな一緒だ・・・
そして、始まった・・・
ゾンビの地獄が・・・
俺はすぐさま引き返そうと思った・・・
だが、足が動かない・・・

何もできない・・・
地面を這いつくばって逃げるしかない・・・
恐い・・・恐い・・・
嫌だ・・・まだ生きたい・・・
こんなところで死にたくない・・・
誰か・・・誰か・・・
そんな思いで必死だった・・・
ゾンビの歩く速度は思ったより遅い・・・
けど、俺が動く方がもっと遅い・・・
そして・・・こっちに向かってくる時・・・
ゾンビの足が何か蹴とばし・・・
俺の体に当たった・・・
信吾：「な・・・なんだ？」
俺は確認した・・・
もしかしたら・・・
そんなことを考えていた・・・
けれど、あったのは・・・
ヘルメット・・・
他に周りには何もない・・・
狭い路地で這いつくばっている俺とヘルメット・・・
追いかけてくるゾンビ・・・
終わった・・・
そう・・・俺は悟った・・・

## ゾンビと警官

こんなことなら・・・
逃げなきゃよかった・・・
信吾：「だれか！！！たすけてくれえええええええええ！！！！！！！」
最後に・・・
気力を食いしばり・・・
俺は叫んだ・・・
そして・・・
ゾンビが俺におおいかぶさろうとしたとき・・・
俺は意識を失いそうになった・・・
けど、女神はまだ・・・
俺を見捨てなかった・・・
拳銃を持った警官：「大丈夫かい？君！！」
駆けつけて・・・ゾンビを俺に襲い掛かってくる寸前のところで蹴り飛ばした・・・
――――バアン
そのまま警官は銃を抜き、撃った
ゾンビ達は足を撃たれ・・・
動きがさらに遅くなった
その間に、警官は俺を担いで逃げてくれた・・・
――――――ビル――――――――――
拳銃を持った警官：「大丈夫かい？名前は憶えてる？」
信吾：「はい・・・ありがとうございます」
拳銃を持った警官：「名前は？」
信吾：「楠　信吾です・・・」
拳銃を持った警官：「そう、僕の名前はラック＝シャーナ、気軽にラックって呼んでくれ」

信吾：「はい・・・」
ラック：「とにかく・・・何が起きているか調べないと・・・」
そう言ってラックは立ち去ろうとした
信吾：「ちょっと、待ってください！！」
ラック：「ん？」
信吾：「なんで、俺を助けたんですか？」
ラック：「助けたかったから助けた・・・ただそれだけだ」
ラックは建物から出て行った・・・
そうして・・・俺は足が動けるようになるまで・・・
ここで、待った
――――――――2時間後――――――――
信吾：「よし・・・動くな・・・」
俺はジャンプをして確かめた
信吾：「それにして・・・帰ってこなかったな・・・・」
もしかしたら帰ってきて一緒に逃げてくれるかもしれない・・・
けど、そんなことが・・・
あるわけがないんだ・・・
みんな自分の命が大切だ・・・
人を助ける暇があるなら・・・
自分だけが助かる道を選びたいだろう・・・
人は本当の選択を迫られたら・・・
多分、助けない・・・
たった・・・一つの命だから・・・
けど・・・もし、永遠だったら？
そして・・・俺は心の中で・・・
その疑問が生まれた・・・
だけど・・・
考える暇は・・・
なかった・・・
――――バアン

拳銃！？
確かに今撃った音がした！！
近くにいるのか？
そうして・・・
ビルを出て行った・・・

## ゾンビと分かれ道

信吾：「どっちだ？銃声が聞こえたのは・・・」
ビルを出てから銃声の方に向かったら、分かれ道があった・・・
どちらも、ゾンビがいる・・・
ただ・・・右は二人・・・左は一人・・・
左の方がわずかに少ない・・・
だけど・・・
ゾンビは人が多い方に行く・・・
なら、右に行った方がいいんじゃないのか？
そう考えていると・・・
また・・・
――――――バアン、バアン
銃声が聞こえた・・・
右からだ・・・
・・・俺は覚悟を決めて・・・
右に向かった・・・
念のため、俺は木の棒を拾っていた・・・
どれくらい、使えるかわからないけど、ないよりはましだ・・・
けど・・・俺が人を・・・ゾンビを殴れるのか？
もう、見ても足はすくまないが・・・
俺は・・・
そう考えてながらも、走っていた・・・
そして・・・人の群れを発見した
だけど・・・その中にラックの姿がなく・・・
みんな怖がりながら戦っている・・・
俺はその場を後にした・・・
助かりたいが・・・
なんだろう・・・

あの中にいたら、駄目な気がした・・・・
そして・・・
その予感は的中した・・・・
：「きゃあああああああ」
：「うが・・・・なんだ・・・・？」
：「ばけものだあああああああ！！！」
信吾：「・・・！！？」
俺は振り返った・・・
そして・・・・
俺は・・・
この目で・・・・
見た・・・・・
ラックの・・・・
姿を・・・

## ゾンビと宿泊

だが・・・
その姿は・・・
もう、人ではなく・・・・
ゾンビでもなく・・・・
ただの、化け物だ・・・・
かろうじて・・・・
顔が原型をとどめていた・・・・
そのおかげでわかったが・・・・
体は、化け物だ・・・・
人を切り裂くほど、鋭い骨が突き出ている・・・・
・・「たすけて・・・・っ！」
切り裂いた・・・・
血が傷口から・・・・吹き出ている・・・・
人は皆・・・・自分だけ助かろうとその場を離れようとする・・・・
だが、ゾンビに囲まれている・・・・
どんどん食われている・・・・
俺はそれを・・・・
ただ・・・・
見ていた・・・・

ゾンビ達が食い終わったようだ・・・・
もう、悲鳴も聞こえない・・・・
ゾンビ達はこっちに向かいだした・・・・

どうしようもない・・・
最後の悪あがきぐらいしてみるか?
意味もない・・・
どうせ、数が減るだけで・・・
俺が死ぬことには変わりがない・・・
・・・どうせなら・・・
学校のやつらも巻き込めばいいんだ・・・
俺は・・・走った・・・
俺達・・学生の宿泊の場所に・・・・

## ゾンビとボール

先生：「！！・・・教頭！！楠君が・・・・」
教頭：「帰ってきたか！！」
かえってすぐに先生たちに迎えられた・・・
どうやら・・知っているみたいだ・・・
先生：「楠君！！こっちに来て！！」
信吾：「いいのか？ゾンビになっているかもしれないんだぞ？」
教頭：「？・・・一体なんのことだい？」
・・・知っていないのか・・・
なら、巻き込むのは簡単だな・・・
思わずにやりとしてしまった・・・
だって、誰も知らない・・・
このあたりで何がおきている・・か・・・
待てよ・・・なんで知ってないんだ？
拳銃の音が最低でも聞こえているはずなのに・・・
知らない・・振りをしている？
だが・・・なぜ？
途端に周りの人があやしく思えてきた・・・
信吾：「嫌な予感がするな・・・」
先生：「？・・・まあ、こっちで晩ごはんを食べましょ」
――――ガッシャーーーーーーン
信吾：「っチ！！」
俺はガラスの割れる音とともに、体を机の下にそむけた・・・
だが、悲鳴は聞こえない・・・
なんだ？
先生：「ップ、楠君・・・そんなに怖がらなくてもいいのよ？」
ガラスの方向を見た・・・
そこにはボールがあり、それで割れたみたいだ・・・

紛らわしい・・・
そう、思った・・・
――――ガッシャーーーーーーン
また、なった・・・
俺は反射的に机の下に行った・・・
そして、今度は悲鳴が・・・聞こえた
：「きゃあああああああああ！！！！！！！！！！」
：「なんだ！？この、化け物は！！！」
本物のようだな・・・
俺は机の下から様子を見・・・
そして、最も安全な道を選び・・・
走り出した・・・
後ろから教師と生徒が数人ついてきた・・・・
他がどうなったか知らない・・・
――――――――エレベーター――――――――
信吾：「はあはあ、クソ、ここまで走るだけで息が切れんのかよ・・・」
先生：「あたりまえよ・・・はあはあ、」
生徒：「先生、あれはなんなんですか・・・・」
戸惑っている・・・
そりゃ、化け物に出くわしたんだ・・・
当然の反応だ・・・
だから・・・ここいるのは逃げてきた者達・・・
これから、どうしようかな？
もう、生き残る可能性はとことん低い・・・
って、もって何もできない・・・
・・・ん？
選択し、残ってなくないか？
いやいや・・・
がんばろうよ、俺・・・

せっかく、ここまで楽しいこと・・・・続き？
本当に？
俺がしたかったのって・・・
こんな・・・むなしいものだっけ？
違うだろ！！！
俺がしたいのは・・・

## ゾンビと壁

【地下鉄通路】

佐奈：「しん・・ご・・・信吾！！」

信吾：「！！？」

佐奈：「朝？だよ・・・」

信吾：「え・・ああ、俺寝てたのか・・・」

懐かしい夢だったな・・・

あれから、だったな俺がゾンビのことを知ったのは・・・

信吾：「どれくらい寝てた？」

佐奈：「多分、１時間ぐらい・・・」

信吾：「そうか・・・」

信吾：「よし！！行くぞ！！」

佐奈：「うん！！」

――――――ギャアアアアアアアアアアアアアア！！！

信吾：「なんだ？」

姿が見えない・・・

暗闇でも・・・

そうか・・・

ここは地下・・・

声が響く・・・

暗闇での、視界の差は５分５分だが・・・

佐奈のことを考えているとやばい・・・

信吾：「乗れ！！」

俺は佐奈をおんぶして、地下を走った・・・・

――――――２，３０分後――――――

守：「信吾！！」

信吾：「やっとおい着いた！！」

守：「すぐにここを封鎖する！！」

信吾：「どれくらいかかる？」
守：「一分もかからない！！」
守は拳銃を引き抜いた・・・
そして、俺達が通ってきた上を撃ち・・・
起爆した・・・・
――――――ドオオオオオオオオオオオン
信吾：「・・・これで、安全は確保できたか？」
守：「いや、ここからさらに壁を作ろうと思う・・・・」
信吾：「俺の出番ないよな？」
守：「ん？・・・まあな」
信吾：「なら、ちょっと飯食わせてくれ」
守：「はいはい」
そう言って飯を用意してくれた・・・
守はいいやつだ・・・
何も聞かないでくれる・・・
佐奈：「おにくーー！！」
信吾：「はっは・・・・」
・・・無理だったんだな・・・
助けるの・・・
そう、実感した・・・
笑っているが・・・
心のどこかで、死ぬほどの悲しみが・・・
あるだろう・・・

# ゾンビと月日

【3年後】
佐奈：「信吾～！」
信吾：「おう、おかえり」
佐奈：「あ、ただいま！！」
あれから、3年がたった・・・
俺は佐奈のめんどうを見ながらも・・・
探していた・・・
ゾンビの親玉を・・・
もう、死んでいる可能性も十分にあるが・・・
ゾンビになっている可能性がある・・・
だから、佐奈に内緒で探し回った・・・
そして・・・場所が分かった・・・
正確には、一定の範囲がわかっただけで正確な場所がわからない・・・

そして、研究所の数が多い・・・
ここから、数キロの場所やさらに遠いのがある・・・
数キロはもう調べた・・・
いなかったが・・・
ゾンビが・・・3年前と比べ物にならない・・・
スピードも、力も、知性はないが・・・
今の人間じゃ・・・
だれも、勝てない・・・
俺がやるしかない・・・
だけど、もし負けたら？
人間はもう、食料としてしか扱われない・・・
俺のようなゾンビも結構増えてきた・・・
そのたびに・・・

ゾータと同じことをした・・・
瓶の数ももう、５０を超えようとしている・・・
これを・・・なにかに使えないのか？
ゾータは人体には影響はないといった・・・
もし、俺が飲んだらどうなるんだろう？
・・・軽率な行動はやめよう・・・
とりあえず、今は・・・
このことを、佐奈に話すか話さないか・・・

## ゾンビと門

佐奈：「いってきまーす」
信吾：「おう、いってらっしゃい」
夜が明けた・・・
行かないといけない・・・
結局俺は佐奈には話さなかった・・・
けど、後悔はしてない・・・
そう思いながら・・・
俺は行く準備をした・・・

【門】

警備：「あれ？楠さんここは出られませんよ？」
信吾：「門を開けてくれ」
警備：「いや、だから」
信吾：「開けろって言っているんだ」
どすのきいた声で脅した・・・
警備はすこしおびえたがすぐに聞き返した
警備：「なんで出るんですか？」
信吾：「用事でな、すぐ帰るよ」
警備：「愛用の刀と食料をそんなにもってですか？」
信吾：「ああ」
警備：「子供はどうするんですか？」
信吾：「聞くな・・・あいつだってわかって・・・」
――――――ドオオオオオオオン
信吾：「！！？」
警備：「！？」
後ろから爆発音がした・・・
この町の周りは城壁で囲まれている
なら・・・何者かが・・・

城壁を破壊した？
信吾：「っチ！！」
俺は食料をいれたバッグを下に置き、刀だけで爆発の方向に走り出した
あっちの方向には学校があった・・・
佐奈が・・・
とても心配だった・・・
【学校】
信吾：「だいじょうぶか！？」
学校では校庭に人が集まっている・・・
訓練通りに、上級生が外、下級生が中
先生たちが周りを警戒し、警備の者を待っている
先生：「！？・・だれです？」
信吾：「佐奈の保護者で、守りに来た！！」
教頭：「ああ、楠さん！！佐奈ちゃんは中の方にいます」
信吾：「そうか」
無事・・と確認した・・・
スラッシャー：「ウガアアアアアアアアアアアア！！！」
俺に対してスラッシャーが食いに来た・・・
こいつが最初に一体みたいだ・・・
信吾：「遅いんだよ！！」
俺は刀を抜き、スラッシャーを縦半分に切った
そして、燃やし、凍らせ、溶かした
燃やす方法は刀の摩擦・・・凍らす方法は俺の体温・・・溶かす方法は塩水・・・
最後に瓶に入れて・・・
しまった！！瓶を置いてきた！！
・・・このまま下に落すか？
肥料になるって言ってたし・・・
けど、なんの？

食い物？
だったらいいが・・・
別の物で人間の毒になったら？
考えただけでも怖い・・・
信吾：「っち！！」
俺は落ちていく液体を・・・
口で受け止め・・・
飲んだ・・・
そして、その瞬間・・・
俺は・・・
体の中で別の何かがうずきまわっているのを感じた・・・
なんだ？これは？
寄生虫が這いずり回っているような感覚・・・
信吾：「ガ・・アガ・・」
信吾：「ウガアアアアアアアア！！！！！！！」
そして・・・
俺はゾンビの栄養になったことを・・・
俺は理解した・・・

## ゾンビと血反吐

信吾：「や・・・ばい！！」
このままじゃ、佐奈達を襲う可能性が出てくる！！」
俺は一目散に爆発の方向に向かった・・・
佐奈には声もかけずに・・・
【爆発現場】
守：「信吾！！来てくれたのか」
その場所は予想通りゾンビがいた・・・
中にはスラッシャーなどがいるが、俺みたいに知性を持ったやつはいないっぽい
信吾：「ここか・・・らは俺に任せろ」
守：「どうした？調子でも悪いのか？」
信吾：「いいから！！お前らは壁の修復だけを考えろ！！」
俺はそう言ってゾンビの中に入って行った・・・
とにかく、入ってきたゾンビを外に連れ出さないといけない
俺はそう思い、一体ずつ蹴とばし、外に出した・・・
信吾：「全部出したぞ！！・・・・・・ガハッ！！」
血反吐を吐いた・・・
こんなこと初めてだ・・・
守たちには見えてないよな？
守：「信吾！！そこから、離れてくれ。そこをふさぐ！！」
大丈夫みたいだ・・・
そして・・・俺は戻ることができない・・・
信吾：「はあはあ、守！！」
守：「なんだ！！」
信吾：「佐奈のことは頼んだ！！」
俺はそう言って・・・・・・
壁の外に出た・・・

大事なものはすべておいて・・・

## ゾンビと外

【壁の外】
スラッシャー：「ガアアアアアアアアアアアアアア！！！！！」
信吾：「おっら！！」
あれから、二日がたった
俺はゆっくりと研究所の方に移動していた・・・
この先、なにが起こるかわからない・・・
たとえ、俺が死ななくても・・・
俺はそれを用心しなくてはいけない・・・
信吾：「それにしても・・・ゾンビの数が少ないな」
壁の外にいたゾンビも片づけたが・・・
異様に数が少なかった・・・
どういうことだ？
しかも、俺は二日歩き続けているけど・・・
今のスラッシャーで5体目・・・
少なすぎる・・・
嫌な予感がする・・・
でも、もう俺は・・・
戻ることができない・・・
俺は・・・
このまま・・・
研究所を破壊し、親玉を殺しに行く・・・
それが・・・
俺の役目・・・
ゾンビ達の・・・
死んでいった者達への慰め・・・
本当に？
そうなのか？

俺がしないといけないのは・・・
そんなことなのか？
冷静に考えろ・・・
俺が今・・・
本当にしないといけないのは・・・
死んだものを慰めることじゃない・・・
生きている者を・・・
助けること！！
俺はそう思い・・・
戻った・・・
人間がいる・・・
守がいる・・・
佐奈がいる・・・
あの・・場所へ・・・

## ゾンビと手遅れ

【町】

信吾：「う・・そだろ」

そこは、もう俺の知っている町じゃなかった・・・

ゾンビであふれかえっている・・・

そして、人はいない・・・

遅かった・・・

信吾：「いや、まだだ・・・」

俺はかすかな可能性を信じて人を探した・・・

――――――5時間後――――――

【信吾と佐奈の家】

俺は膝をついた・・・

町のいたるところを探した・・・

最後に自分の家を探した・・・

そこには・・・

血まみれで・・・

壁に釘で張り付けられている・・・

佐奈と・・・

守の・・・

変わり果てた姿があった・・・

信吾：「うあああああああああああああああああああ！！！！！」

最悪だ・・・

手遅れだった・・・

自分を責めるような言葉がたくさんあふれ出てくる

なんで・・・

俺はあの時・・・

出て行ったんだよ！！

行かなかったら・・・

佐奈は・・・・
守は・・・・
助かったかも知れないのに！！
信吾：「うあああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！」

## ゾンビと時間

・・・一体・・・・
どれくらいたったのだろう・・・
俺は佐奈と守の墓を作りながらそんなことを思った・・・
泣き叫んでいたのはどれくらいだ？
墓を作っていたのはどれくらいの時間だった？
死体を焼いたのはどれくらいだった？
俺は時間を気にしていた・・・
周りにはもうゾンビの姿がない・・・
ということは他に人がいて・・・
そいつらを食いに行った・・・
その可能性が出てくる・・・
今のゾンビの足の速さは、５０ｍ１３秒・・・
だから・・・
何時間ここにいたかさえわかれば・・・
ゾンビを追いかけ・・・
ここまでした奴に追いつけるかもしれない・・・
だけど・・・
時間がわからない・・・
だれがやったかもわからない・・・
だって・・・・
俺はここにはいなかった・・・
どうしよう・・・
研究所・・・
今さらだが行くのをやめようと思ってきた・・・
俺の生きる・・・
希望はもうない・・・
なら・・・ゾータやほかのやつらみたいに・・・

無理だ・・・
あの作業は最低でももう一人いる・・・
死にたい・・・
だれか教えてくれ・・・
俺は・・・
これから・・・
どうすればいいんだ？

## ゾンビと怒り

俺は重い足取りで家を出ようとした・・・
少しでも長くこの家を使いたい・・・
佐奈との思い出・・・
守との思い出・・・
この家にはいろんなものが詰まっている・・・
だから・・・
そのためには補強が必要だ・・・
そう思い俺は家を出た・・・
？：「おや、帰ってましたか」
信吾：「ああ？」
？：「わたくしの名は、ジーク・・・以後お見知りおきを・・・」
なんだ？
スーツを着て・・・
ああ、俺と同じやつか・・・
信吾：「忙しいからどっか行け・・・」
ジーク：「いいのですか？」
信吾：「いいよ別に・・・」
ジーク：「殺したのがわたくしでも？」
――――――――バン
ジーク：「！？・・ガア！」
俺は殴っていた・・・
殺したのが・・・
こいつだとわかったから・・・
信吾：「おらあああああ！！！！！！」
殴る蹴る・・・
一秒で・・・
それを８回繰り返した・・・

ジーク：「ア・・ガ？」
なにがおこったか・・・
わかっていない・・・
だけど・・・
俺の怒りは収まらない・・・

――――――――――数分後――――――――――

ジーク：「・・・・・・」
動かなくなってきた・・・
さっきまで少し動いていたが・・・
もう反応がない・・・
信吾・「はあはあはあはあ・・・」
むなしい・・・
こんなにもむなしいのか？
さっきまであんなに憎んでいたが・・・
いや・・・いまでもにくい・・・
だが・・・
なんだろう？
この感覚・・・
復讐を成し遂げたから？
違う・・・
悲しいんだ・・・
むなしいし、悲しい・・・
やることが・・・
なくなり・・・
生きていく意味もない・・・
死ねない・・・
・・・そう言えば・・・
こいつ・・・
気絶したのか？
動かなくなっているけど・・・

まさか死んだ？
いや、こいつはゾンビに襲われてない・・・
じゃあ、ゾンビのはずだ・・・
一応、のど元に手を当てた・・・
これは人間もゾンビも一緒・・・
生きているなら・・・・
呼吸で動く・・・
だけど・・・
こいつは・・・
動いてなかった・・・

## ゾンビとヨミナ

死んだ！？
バカな・・・
なんで・・・
死んでいるんだよ！！
死なないはずだろ・・・
俺は今まで・・・
３年間ゾンビと狩り続けたが死んだことは一度もない・・・
絶対動いた・・・
そのたんびにおれは逃げた・・・
なのに・・・
なんでこいつは・・・
死んだんだ？
考えようとした・・・
だが・・・
？：「あれ？ジーク死んだ？」
信吾：「誰だ！？」
？：「あわてるなよ・・一応自己紹介だ・・・俺の名前はヨミナそっちは？」
信吾：「信吾だ・・・」
ヨミナ：「へえ～君がか・・・っでジーク死んでる？」
信吾：「わからん・・・」
ヨミナ：「死んだんだ・・・はあ、あれほど気を付けている奴が死ぬのかよ・・・」
信吾：「なんでこいつは死んだんだ？」
ヨミナ：「君が殺したからでしょ？」
信吾：「殺したが・・・それだけで死なないだろ・・・」
ヨミナ：「はっは・・何言ってんの？普通は死ぬよ？ペンじゃない

んだし・・・」
信吾：「ペン？」
ヨミナ：「ほら、人間を食うやつらのこと・・・」
信吾：「ゾンビじゃないのか？」
ヨミナ：「そう呼んでもいいけどね、あいつらは・・・」
信吾：「詳しく教えてもらおうか・・・」
――――ゴン
ヨミナ：「！！・・・あああああああああ！！！！！！！」
俺はヨミナの足を、折り砕いた・・・
その足は・・・もう、足とは言えない・・・
信吾：「知っていることすべて言え・・・」
ヨミナ：「な・・・なんでこんなにこいつは・・・」
信吾：「質問一だ・・・ペンってなんだ？」
ここから・・・俺の質問が始まった・・・

## ゾンビと意識

ヨミナ：「ペンっていうのは・・・」
――――ドオオオオン！！！
信吾：「！？」
ヨミナ：「くたばりな・・・」
周りには、銃をこっちに向けている人？が多数・・・
そして・・・俺は右肩を撃たれた・・・
：「・・・貴重だが、まあいい・・・」
信吾：「てめえが・・親玉か・・・」
：「そうだ・・・ここにいる奴をしきっているからな・・・」
信吾：「殺してやるよ・・・」
そう言って足に力を入れ、殴り掛かろうと・・・
――――ドオオオン！！！！
信吾：「ウ・・ガ・・・」
また、当たった・・・
おかしい、俺ならまだ動けるのに・・・
なんで・・・この弾は当たったら・・・
動けねえんだ？
ヨミナ：「さて・・・・そろそろ、仕返しさせてもらお・・・」
――――――ガン！！
右肩になにか・・・貫かれた・・・
なんだ・・・
ヨミナ：「おらっよ！！」
蹴とばされ・・・壁に貼り付け・・・
――――ガン、ガン、ガン、ガン、ガン、ガン、ガン、ガン、ガン、ガン
あ・・・・・れ・・・・・
お・・・・かし・・・いな・・・・
な・・・・んだ・・・か・・・

いし・・・きが・・・・・
とぎ・・・れて・・・
い・・・・・く・・・・・・・・・

## ゾンビと???

【???】

信吾：「ここは・・・どこだ？」

目の前には・・川が流れている・・・

なんだか懐かしい・・・

昔、ここに来たことがあるような気がする・・・

一面に花畑・・・

どこなんだ？

ここ・・・

・・・あれは！！

信吾：「佐奈！！！」

川の向こうには・・・佐奈がいる・・・

その隣は・・・守がいる・・・

なんでいるんだ！！

でも、そんなことはどうでもいい！！

もう一回会えた！！！

うれしい！！

うれしすぎる！！！

俺はそう思いながら、川を渡ろうとした・・・

だが・・・

わたることは無理だった・・・

不意に手を後ろにひかれた

誰かに捕まれている・・・

誰だ？

俺は後ろを見た・・・

俺の手を捕まえているのは・・・

俺だ・・・

## ゾンビと〇〇〇

信吾：「放せよ！！」
信吾（？）：「・・・・」
ゆっくりと首を振った・・・
信吾：「なんてめえなんかにとめられないといけねえんだ！！！」
俺は怒っている・・・
早く・・・佐奈達と・・・
話がしたい・・・・
ゾンビなんてどうでもいい・・・
だが、こいつは俺の手首を放さない・・・
それどころか・・・
――ガン
信吾：「ウ・・ア」
頭をたたかれた・・・
信吾：「なにすんだよ！！」
信吾（？）：「・・・・・・」
いつまでたっても・・・返事はない・・・
俺はこいつに殴りかかった・・・
だけど・・・
当たらない・・・
手首を触った・・・
触れた・・・
こいつは・・・
いったいなんだ？
信吾（？）：「俺は・・・おまえじゃない・・」
信吾：「は？」
信吾（？）：「そして・・・お前はあっちにはいけない・・・」
信吾：「一体どういう・・・」

信吾（？）：「お前は・・・○○○だから・・・・」
そう言って・・・手首を放した・・・
そして、周りは暗くなり・・・
何も見えない・・・
不意に足元が宙に浮くような感じがした・・・
いや・・・俺は・・・・そのまま・・・
どこまでも・・・
落ちて行った・・・

## ゾンビと異変

：「おい！！こっちに武器があるぞ！！」
：「よかった・・・って刀じゃん！！すげええ！」
・・・話声がする・・・
：「こらあ！！行動をみだすんじゃない！！」
女の声もした・・・
いや・・耳を研ぎ澄ますと・・・
いろんな人の声がする・・・
目があけれない・・・
なんでだ？
：「うあ！！・・・これ・・・なんだと思う？」
：「さあ？彫刻の失敗作とか・・・」
：「でも、釘でこんなに原型とどめれるか？まるで・・・生きているみたいだぞ？」
女：「それより・・・ここってやっぱり家だと思う？」
：「ああ、だって屋根もあるし・・・何より住んでた形跡が残っている・・・」
女：「・・・ペンにやられたか・・・」
・・・ペン・・・・・
そう言えば・・・・・・
俺は・・・
なんで動けないんだ？
思い出せない・・・
佐奈達はどこにいるんだ？
川の向こうはどこだ？
俺の姿をした奴はどこだ？
疑問が生まれる・・・
そして・・・不意に・・・

俺の体に・・・・・
異変を感じた・・・
貫かれていた者が取れていく・・・・
釘が腐って・・・俺がちょっとでも動くととれる・・・
だから・・・
俺は今ある力を振り絞って・・・
動いた!!!

## ゾンビと復活

信吾：「うおおおおおお！！！！」
：「うあ！動いた！！」
俺は釘から脱出した・・・
貫かれているは朽ちていき・・・
俺の体から落ちて行った・・・・
まだ、少しだけ感覚がマヒしている・・・
周りは俺に対して銃口を向けている・・・
死んだと思われていたのか・・・
まあ、いいや・・・
信吾：「・・・ここは、どこだ？」
知っている風景ではない・・・
でも・・なんだろう・・・懐かしい・・・
懐かしいのに・・・悲しい・・・
なんだ？この感覚・・・
俺は後ろに振り返った・・・
そこは・・・
俺の家だ・・・
佐奈との・・・
思い出の詰まった・・・
でも・・古くなっている・・・
今にも、こわれそうだ・・・
信吾：「まさか・・・俺は・・・・また・・・・」
眠っていたのか？
女：「おい！！貴様何者だ！？」
：「そうだ！！」
信吾：「今・・・何年か知ってるか？」
女：「４０００年の、６月４日だ・・」

信吾：「そうか・・・・あ・・・・その刀・・・・」
：「これ？」
俺の刀だ・・・
信吾：「悪いな、返してくれ」
女：「断る・・・貴様が何者かわからないのに・・・・」
信吾：「俺のもんだ・・・返してもらう」
女：「力ずくでもか？」
空気が変わった・・・・
周りは敵だらけ・・
だけど・・警戒するほどじゃない・・・・
信吾：「やめとけよ・・・それぐらいじゃ俺は殺せねえよ・・・」
女：「ふん、それはどうかな？」
：「撃て！！！！」
――――パアアアン
銃弾が飛んでくる・・・・
あれ？
おかしいな・・・・
ゆっくりと来ているみたいだ・・・・
俺の動体視力がさらに、強化したのか？
１０００年の間に・・・・
俺は避けた・・・・
銃弾はそのまま通り過ぎた・・・・
：「な・・・に・・・・」
女：「隊長！！なぜ！？」
信吾：「もういいか？」
：「っひ！！」
武器を捨てて逃げていく・・・・
周りのやつらは逃げて行った・・・・
女ひとり残して・・・・
俺の刀を拾った・・・・

女：「・・・・・・」
信吾：「逃げなくていいのか？」
女：「なんで、逃がすんだ？貴様なら今すぐにでも殺せ・・・」
信吾：「俺は・・・もうどうでもいいだよ・・殺す、殺さない、死ぬ、死なない・・・そんなもんが・・・もうどうでもいいだよ・・・」
これは俺の本心だ・・・
俺は・・・どうあがこうと死ねない・・・
現に、俺は１０００年もたっているのに・・・
信吾：「ほら、さっさとどっか行け」
女は去って行った
死んでいない・・・
そこらのゾンビと同じで・・・
ゾンビ？
そう言えば・・・
ペン！！！
そうだ・・・
ゾンビとは違う・・・
ペンがいた！！！！
どう違うんだ？
ゾンビとペン・・・
俺が今まで戦っていたのは・・・
どっちだ？
ゾンビか・・・
ペンか・・・
ていうかペンってなんだ？
まあいいや・・・
それより・・・
どうやったら死ねるだろう・・・
死にたい・・・

俺が一番危機に陥ったのって・・・・
吐血・・・
そうだ！！
飲んだ時・・・
吐血を吐いた！！
あれが・・・・
俺を殺してくれる？
俺は思い出し、部屋に入った・・・・
そして・・・・
手当たり次第・・・・
瓶に入った・・・・
液体を飲んだ・・・・
――――――ドクン――――――

## ゾンビと・・・「殺す」

信吾：「ウガアアアアアアアアア！！！！！！！！！！！！！！」

【？？？】

いた！！！

佐奈達が・・・

同じようにいる！！！

やった！！

成功だ！！

ここは・・・

てんご・・・・

ーーーグサッ

信吾：「ゴフッ！！だれ・・・だ・・・」

信吾（？）：「死ね・・・・・」

こいつは刀を持って・・・

俺の胸を貫いた・・・・

動けない・・・

なんでだ・・・

信吾：「なんで・・・俺を殺す！？」

信吾（？）：「死にたいんだろ？」

信吾：「今はちが・・・」

信吾（？）：「よーく、覚えてろ・・・貴様は・・・」

信吾：「うおおおおおおお！！！！！」

刀を刺されたまま、俺は殴った・・・

そうしたら、刀は抜けた・・・

血は・・・

出ていない・・・

信吾（？）：「いいだろう・・・やってやるよ・・・貴様を・・・

殺す！！！」

## ゾンビと怒り

俺に有利なことは、何もない・・・
あるのは・・・
川の向こうに行きたいだけだ・・・
こいつを倒さなくても、すり抜けれたら・・・
信吾（？）：「無理だ・・・すり抜けるのは・・・」
っチ！読まれている！！
なら・・・
信吾：「おらっ！！」
地面を蹴り、土で目つぶしを・・・
信吾（？）：「できると思うか？」
刀が俺に向かってくる！！
俺は間一髪避けた・・・
危ない・・・
避けれなかったら・・・
信吾（？）：「真っ二つだったのにな・・・」
信吾：「・・・・さっきからてめえはなんなんだよ！！邪魔をして！！」
信吾（？）：「・・・・・」
信吾：「俺はな・・・ただ・・・佐奈や守の会いたいだけなんだよ！！！！」
信吾（？）：「駄目だ」
信吾：「なんでだ！！」
声が荒々しい・・・
俺は怒っている・・・
信吾（？）：「その、答えはいずれわかる・・・」
信吾：「いずれっていつだよ！！！」
信吾（？）：「さて・・・そろそろ、お別れだ・・・」

信吾：「は？」
どういうことだ？
信吾（？）：「最後にヒントだ・・・俺は誰だと思う？」
信吾：「そういうことだ！？」
信吾（？）：「それがわかったら・・・」
また・・・
足元が宙に浮こうとしていた・・・

## ゾンビと狂い

まさか・・・また、俺は戻るのか！？
いやだ、いやだ、いやだ！！
俺はもう・・・
あんな地獄に・・・
生き地獄に戻るのは嫌だ！！
ここで・・・佐奈や守・・・
もしかしたら、昔あった奴にも会えるかも知れない
なのに・・・
このまま、戻れば
俺は孤独・・・
信吾「うおおおおおおおおおお！！！！！」
信吾（？）「な！？」
俺はとっさに、こいつの服を掴んだ！！
これで・・・
信吾（？）「・・・無理だよ・・・ここにおまえが居続けるのは・・・学習しろよ」
信吾「なんでだ！？」
信吾（？）「前に言っただろ？お前は○○○だから」
信吾「それが、なんなんだ！！答えろ！！」
怒り狂っている・・・
自分でもわかる・・・
そして・・・
俺は、また暗い闇に落ちて行った

## ゾンビと夢

――――――――――――――――――夢――――――――――――――――――

【信吾の家】

信吾「おーい・・・ってまだ寝てねえのか？」

佐奈「うん・・・」

信吾「明日も学校だろ？なら、早く寝ろ」

佐奈「なんだか、今寝たら・・・信吾がどっか行っちゃうような気がして・・・」

信吾「俺は、どこにも行かねえよ」

佐奈「ほんと？」

信吾「ああ、俺はウソはつかねえよ・・・」

佐奈「じゃあ、指切り！！」

そう言って、佐奈は俺に小指を突き出してきた

信吾「ゆーびきりげんまん」

佐奈「うそついたら、はりせんぼんのーます」

信吾と佐奈「指切った！！」

・・・これは、信吾と佐奈、守がまだいた時に・・・

もし、こんなふうに変わっていればいいな・・・

と思う・・・

夢物語・・・

## ゾンビと学力

【朝】

信吾「おーい、佐奈！！起きろ！！遅刻するぞ」

佐奈「えー？もう、そんな時間？」

信吾「早くしろ・・・じゃないと、守先生が起こるぞ？」

３年前、俺達はゾンビから逃げ切った俺達は、平和な日常を暮していた

学校もでき、そこでは守が先生をやっている・・・

佐奈も、今は小学６年生・・・

最初見た時は、ちっちゃな子だったのに、もう６年生だ・・・

そして・・・俺は・・・

佐奈と保護者とその学校で先生をやっている・・・

ついでに、体育の教師だ・・・

守がいつでも、子供たちを守れる体制で行きたいって言ったから、

俺はそれに賛成した・・・

まあ、正直高校を卒業したからなんとかなると思っていたが・・・

全然無理だった・・・

算数のレベルは大学レベル・・・

国語も、訳の分からない文字を読み書き・・・

１０００年の間で変わっていた・・・

つまり、俺の学力は今の時代じゃほぼ０に等しい・・・

まあ、一般生活で困らないからいいけど・・・

教師で行くには、ちょっと無理なため・・・

結果、体育の教師・・・

そして、今日も・・・

いつもの日常が始まろうとしていた・・・

## ゾンビと平和

【学校】

信吾「う～ん、平和だなあ」

守「確かに、ここ最近、壁の外にもゾンビはいないらしい」

信吾「・・・一気に攻めてきたりしないよな？」

守「大丈夫だ、壁の強度は爆弾程度じゃないと壊れないから」

信吾「なら、いいが・・・」

なんだろう・・・

この感覚・・・

嫌な予感とはちょっと違う・・・

・・・なんだか、失敗した世界を知っているみたいな感じだ・・・

先生「あの～ちょっと、いいですか？」

守「はい、なんでしょう？」

いつも通り、守は質問に答える・・・

俺は横でお茶をすする・・・

先生「いや、楠先生に聞きたいのです」

信吾「ゴフッ！！」

いつも通りじゃなかった・・・

そして、思わずふいてしまった・・・

信吾「ゲホッ！ゴホッ！はあはあ、なにか用ですか？」

守「大丈夫かい？信吾？」

信吾「大丈夫・・・大丈夫・・・」

呼吸を整えながら守に軽く大丈夫と言った

先生「え～っと、出直した方がいいですか？」

信吾「大丈夫です、話してください」

先生「実は、さっき校門の方で、あやしい人がたってたんです」

信吾「それで？」

先生「その人に声をかけたら、信吾って人はいますかと聞かれ」

守「・・・苗字じゃなく、名前の方・・・て言うこと親しい人じゃ」
先生「呼びましょうかと、聞きましたら逃げてしまって」
信吾「逃げた？」
先生「はい、ものすごい速さで」
信吾「どういうことだろうな・・・」
先生「さあ？」
守「まあ、用事があるならいずれわかるさ」
信吾「そうだな・・・」
そして・・・
学校が終わった・・・

## ゾンビと買い物

【家】

佐奈「ふう～ごちそうさま」

信吾「はいはい、お粗末様」

佐奈「そう言えば、信吾ってごちそうさまを、お粗末様って言うよね」

信吾「それがどうかしたか？」

佐奈「いや、なんか変だなあと思って」

信吾「まあ、これが一番いいやすいからな俺の中で」

佐奈「ふ～ん、変なの・・・それより！明日予定ないよね！？」

信吾「ん？ん～・・・今のところないな・・・」

実際のところ、ゾンビの親玉倒さないといけないが・・・

まあ、急がばまわれ・・・

俺はいつまでも、生きれるが佐奈は違う・・・

俺の元を離れるまでは探すのはなしにしよう・・・

佐奈「じゃあさ、明日買い物に行こうよ」

信吾「？・・・確かいる物は全部買ったよな？」

先週、デパートができたからそこでいる物すべて買ってきた・・・

佐奈「いいじゃん！！行こうよ～～」

うわあ・・・駄々っ子モードだ・・・

こうなると、佐奈は言うことを聞かない・・・

信吾「はあ、わかった。明日でいいな？ちょうど土曜日だし」

佐奈「うん！！」

―――ピンポーン

佐奈「お客さん？」

信吾「だろうな・・・ちょっと出てくる」

佐奈「は～い」

―――ガチャ

俺は玄関の扉を開いた・・・・
そこには・・・
女子高生が立っていた・・・・

## ゾンビと隣の女子高生

誰だ？
ボロボロの女子高生の制服・・・
昔のようだ・・・
・・・あれ？
もしかして、俺・・・
こいつのこと知ってる？
いや、知らないはずだ・・・
女子高生に知り合いは・・・
女子高生「おじさん・・・久しぶり」
信吾「！！」
久しぶり！？
おじさん！？
なんだ・・・
こいつは誰なんだ！？
俺に知り合いは・・・
いる・・・
あの時死んだ・・・
隣の・・・
娘の・・・
女子高生「相坂（あいさか）、凛（りん）・・・覚えてる！？」
信吾「・・・ああ」
俺が助けられなかった一人だ・・・
凛「よかった～忘れられてたらどうしようかと思ったよ」
信吾「なんのようだ？」
凛「いや、町に入ってからおじさんの姿見たから挨拶に来ようと思って」
信吾「・・・それだけじゃないだろ？」

凛「ん～、やっぱりわかっちゃうか・・・・」
信吾「殺しに来たのか？」
凛「違う違う、そんなぶっそうなことじゃないよ」
信吾「じゃあ、なんだ？」
凛「おじさん・・・意識が回復してから何年たってる？」
信吾「3年ぐらいだが？」
凛「ふ～ん、私より2年も多いんだ・・・・」
信吾「そうだが・・・何か関係あるのか？」
凛「うん・・・実は・・・・」
佐奈「信吾～何してるの？」
後ろから佐奈の声がした・・・
凛「！！」
凛が後ろに飛びのいた・・・
信吾「どうした？」
凛「その子・・・・」
信吾「佐奈がどうかしたか？」
凛「・・・一つ聞いていい？私達をこんな体にした奴のこと知ってる？」
信吾「それは探し中だが？」
凛「そう・・・いいわ、今日はもう遅いし出直すは・・・・」
そう言って帰った・・・

# ゾンビとソフトクリーム

【朝】

佐奈「う～まだ眠いよ・・・」

信吾「そろそろ、自分で起きれるようになってほしいんだが・・・」

俺達はデパートに向かっている

昨日、晩飯の時に言われたの守りながら行ってるんだが・・・

佐奈「できれば、もうちょっと寝かせて欲しかった・・・」

佐奈は朝が弱いから、眠たそうだ・・・

信吾「ほら、さっさと行くぞ。欲しいものがあるんだろ？」

佐奈「え？ないよ」

信吾「は？」

佐奈「いや、今欲しいものは別にないけど・・・」

信吾「え？でも、買い物にいこうって・・・」

佐奈「うん、でも今これと言ってほしいものはないよ？」

・・・なんの駄々っ子モードだったんだ？

信吾「はあ、じゃあとにかくどっか行くぞ？デパートじゃなくていいんだろ？」

佐奈「うん・・・でも、あともうちょっとだけ・・・」

信吾「おきろ！！！」

【公園】

佐奈「う～、まだ眠たいのに～」

信吾「おいおい、ほらソフトクリームだ」

佐奈「食べながら寝てもいい？」

信吾「・・・できるならやってみれば・・・」

そう言ったら、佐奈はソフトクリームに顔を近づけた・・・

目を閉じたまま・・・

まさか！！

―――パク

食べた！！！
嘘だろ！？
あんなことできんのかよ！！！
驚きでいっぱいだ・・・
しかも、器用にどんどん食べていく・・・
！！！
ここで俺は不思議なことに気が付いた・・・
ソフトクリームは気を付けて食べないと口の周りにクリームが付く・・・
なにの・・・
どうして・・・
こいつにはついていないんだ！？
器用すぎるだろ！！
て言うか・・・これ寝てるのか？
おそるおそる
頬をつねってみた・・・
起きてるなら、なんらかの反応を示すはず・・・
だけど・・・佐奈は・・・
反応を示さなかった・・・

## ゾンビと両手に花

凛「すごいね・・・佐奈ちゃん」
信吾「うお！！・・・凛か・・・」
凛「うん、この公園に入ってきたのは知っていたからいつ話しかけようかなあと思ってい見てると・・・」
信吾「これだもんな・・・」
もう、佐奈の手にはソフトクリームはなく・・・
俺にもたれかかってきている・・・
信吾「っで、なんのようだ？」
凛「いやあ、まさかここまでゾンビを相手に無神経で近寄れるってすごいなあと思って・・・」
信吾「そうだよなあ・・・」
凛「知っているんでしょ？おじさんの正体」
信吾「ああ・・・そう言えば昨日お前、なにか言いかけていたよな？」
凛「・・・ああ、そのことね」
信吾「出直すって言ってたけど何言おうとしてたんだ？」
凛「そうね・・・」
そこから、凛は俺達と同じベンチに座り・・・
佐奈と同じように寝た・・・
信吾「っておい！！！」
はさまれて動けない・・・
・・・まあ、こんな休日もいいかな・・・
そう、思っていた・・・
守「・・・ッチ！！両手に花か・・・」
信吾「だれだ！！！」
【夕方】
佐奈「う、う～ん」

凛「・・・ふあああ」
信吾「お、やっと起きたか」
凛「・・・寝てた？」
信吾「思いっきりな」
凛「あちゃー、おじさんに変なとこ見られちゃったな」
佐奈「だれ？」
佐奈も起きたみたいだ
信吾「初対面だったな、こいつの名は」
凛「凛です、凛ってよんで」
佐奈「り・・ん？」
凛「そう、凛」
佐奈「わたしは・・・」
凛「知ってるよ・・・佐奈でしょ？」
信吾「それより、凛？お前時間とか大丈夫なのか？」
凛「え？」
信吾「いや、この・・・なんでもない」
そうだ・・・
ここは１０００年後・・・・
親が心配するわけがない・・・
佐奈「・・・信吾～おなかすいた・・・」
信吾「はいはい・・・・凛もどうだ？」
凛「え？わたしも？」
信吾「別にいいだろ？」
凛「う、うん」
信吾「じゃあ、行くか・・・」
俺は佐奈の手と凛の手をつないで帰った・・・

## ゾンビとクイズ

【家】

信吾「ふう、ただいまー」

佐奈「ただいまー」

凛「おじゃまします・・・」

守「おじゃましまーーー」

――――ドン！！

守「ゴフッ！！？」

佐奈「？・・・今だれかいなかった？」

凛「さあ？私にみえなかったけど・・・」

信吾「気にしなーい気にしなーい」

守「しん・・ご・・・・ガクッ」

・・・なんであいつ子持ちなのに女に興味持たれようとするんだろう・・・

そんな信吾を吹っ飛ばし俺は家に入った・・・

信吾「さて・・・俺は飯の準備するからテレビでも見てろ」

凛「え？それなら私が・・・」

信吾「お・ま・え・は・いまなんだ！？」

凛「え？」

佐奈「お客さんでしょー？」

信吾「はい、佐奈さん正解！！正解の賞品として凛を連れていけ！！」

佐奈「あいあいさー」

凛「え？え？・・・ぎゃあああああ！！！！！」

佐奈は自分の部屋に連れて行った・・・

すぐに叫び声が聞こえた・・・

・・・確か佐奈の部屋って女性ならやばいよなあ・・・

俺はそう思いながら調理を始めた・・・

凛の無事を祈りながら・・・

## ゾンビとフライパン

【夜】
凛「・・・・・」
佐奈「なんで気絶しちゃったんだろ・・・・」
信吾「深く考えるな・・・感じるんだ・・・・」
凛は泡を吹いて気絶している・・・
ゾンビが気絶するほどの怖さだったか・・・
凛「う・・・うん・・・ここは？」
信吾「あれから１０００年後の世界」
凛「え！？」
ＳＡＮＡ「ドーーーン！！」
―――カアアアン！！！
信吾「ガ・・・ハ・・・・」
なんだ？
頭を固いもので・・・
て言うかフライパン？
信吾「さ・・な・・・なにを・・・」
ＳＡＮＡ「・・・つまらぬものを切ってしまった・・・・」
信吾「切れてねえよ・・・」
なるほど・・・突っ込みか・・・
て言うか佐奈もテンションあがってるなあ・・・
佐奈「それより、ごはんごはん」
凛「？・・・？・・・？？」
信吾「ほら、凛来い飯だ」
凛「あ、うん」
それから・・・俺達は飯を食べた・・・
守「わたしは・・・いつまでも・・・」
―――カアアアン！！！

守「ゴフッ！！！」

まあ、最後に守をフライパンで吹っ飛ばしたけど・・・

## ゾンビとフライパン？

【朝】

・・・結局凛のやつ泊まって行ったな・・・
あいつの家ってどこだろう？
俺の中でちょっとした疑問が生まれた・・・
凛「おはよーー」
佐奈「ＺＺＺ・・・」
信吾「・・・おはよ」
凛「ごめん・・無理だった・・・」
信吾「やっぱりか・・・」
佐奈を起こすのははっきり言って俺以外無理な気がする・・・
ていうか、あの部屋で寝れる佐奈はすごいと思う・・・
凛でも・・・
あれ？
信吾「そう言えば、叫ばなかったな？おまえ」
凛「うん・・・なんとか耐性ついたみたい・・・」
信吾「・・・ドンマイ・・・」
佐奈「ＺＺＺ・・・」
信吾「・・・もしかして、佐奈。寝て振りしてるのか？」
佐奈「・・・・・」
凛「え？でも、起きなかったよ？」
信吾「・・・脇腹こちょばしてみろ」
凛が佐奈の脇腹に触れようとした・・・
その時！！
守「ここは！！？」
・・・まさか、あいつあれからずっと寝ていたのか？
佐奈「や、ちょ、そこは・・・」
凛「起きていたのね・・・」

佐奈「・・・ごめんなさい・・・あれ？信吾フライパンなんか持ってどこ行くの？」
信吾「ん・・ちょっとな・・・」
・・・・・・
・・・
・
守「ぎゃあああああああ！！！！！！」
――――カアアアン！！
・
・・・
・・・・・
信吾「ただいまー」
凛「え？・・・おじさん、なんかフライパンへこんでいるけど・・・」
佐奈「気のせいだよ、いつもあんな感じだよ」
凛「え？・・・え！？・・・・え？」
信吾「さて・・・朝飯ができているぞ」
佐奈「はーい」
凛「あ、いただきます・・・おじさん、どこ行くの？」
信吾「先に食べててくれ、ちょっと電話する」
――――ピリッピリ！！
守の嫁「もしもし？」
信吾「・・・俺の玄関前・・・気絶中」
守の嫁「ありがとうございます」
――――ガチャ
信吾「さて・・・飯にするか・・・」
守のことは置いといて・・・

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2207w/

---

死なないゾンビ

2011年12月11日20時49分発行